

第6回 首都直下地震時等の 災害ボランティア活動 2021 連携ワークショップ 報告書

平成26年(2014年)度より実施している「首都直下地震時の災害ボランティア活動連携訓練」について、昨年度より名称を「連携訓練」から「連携ワークショップ」に変え、さらに、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止対策によりオンラインにて、事前学習～メイン・プログラム～スピンオフ・プログラムと構成を変えて参加費無料で実施しました。東京湾北部地震の3か月後を想定し、昨年度から引き続きNPO・ボランティアグループ、生活協同組合や労働組合、青年会議所等の方々を主な参加対象とし、災害時および平時から互いに連携する可能性を探りました。

日時 【メイン・プログラム】2月21日(日)プレイヤー参加 13:00～17:20／見学参加 13:00～15:10
【スピンオフ・プログラム】2月24日(水)18:30～20:30

会場 オンライン (Zoom)

参加者 合計：200名

●メイン・プログラム プレイヤー参加 41人

※ボランティアグループ、NPOのスタッフ、大学ボランティアセンター職員、都内ボランティアセンター職員、生活協同組合職員、青年会議所メンバー、産業別・企業別労働組合組合員などが参加。

●メイン・プログラム 見学参加 64人

※NPO、NGO 職員、都内ボランティアセンター職員、青年会議所メンバー、企業別労働組合組合員、生活協同組合職員、行政などが参加。

●スピンオフ・プログラム 65人

※内訳：プレイヤー参加より18人／見学参加より22人／スピンオフ・プログラムのみ25人

●その他(コメンテーター、登壇者、WGメンバー、サポートメンバー、事務局) 34人

※うち4名は参加者と重複

主催 東京都災害ボランティアセンターアクションプラン推進会議

事前学習(動画・資料・オンラインツール等)

■全参加者共通(必須)

●本連携ワークショップの目的等について視聴(動画・20分)

■2/21メイン・プログラム プレイヤー参加者(必須)

●首都直下地震3か月後に想定される状況について視聴(動画・12分)

●被災者支援プログラムについて視聴(動画・19分)

●ワークショップの状況設定を読む(A4・1枚)

●クイズに挑戦(6問)

※回答者にはA-yan Tokyo作成「震災が残したもの」1巻～14巻の無料ダウンロード特典あり

●Jamボードの使い方について視聴(動画・1分30秒)

■全参加者共通(参考・任意)

●【フルバージョン】本連携ワークショップの目的等について視聴(動画・44分)

メイン・プログラム（プレイヤー参加・見学参加共通）

※開会前の約 55 分間に事前学習動画を放映しました

開会挨拶 東京災害ボランティアネットワーク 共同代表
東京 YMCA 菅谷淳さん



総合司会
連合東京 真島



【イントロダクション】プログラム 1（事前課題）：振り返り

- 事前課題の動画視聴によって確認された本ワークショップの目的について、振り返りをしました。あわせて、主催団体である「東京都災害ボランティアセンターアクションプラン推進会議」について、事務局である東京ボランティア・市民活動センター 加納より説明しました。
- 事前課題：動画「本連携ワークショップの目的等について」
説明：東京都立大学 市古、連合東京 真島、東京ボランティア・市民活動センター 加納

【パネルディスカッション】プログラム 2：事例報告とクロストーク

- 「いつもの取組みが災害時に役立つ・生きる！」をテーマに、普段の取組みが災害時に活かした事例や、過去の支援活動の連携事例を 3 団体より発表いただきました。クロストークは時間の関係で実施が叶いませんでしたが、それぞれの発表についてコメントをいただきました。

<登壇者／推薦者>

①よりみちステーション（佐賀県） 小林由枝さん／シャンティ国際ボランティア会 (SVA) 渡邊

「有事を支えたのは日常からのつながり」として、令和元年佐賀豪雨災害での経験をお話いただきました。形式的なつながりや災害時に限定したつながりではなく、普段からのゆるやかなつながりと平時の活動を活かし、子どもの居場所作りと親子のサポートをされました。居場所では、看護師への相談、コーヒーショップ、アロマ・ドッグセラピー、物資支援や炊き出しなど多種多様な支援を実施しました。

②三鷹市井の頭一丁目町会長 竹上恭子さん／AAR Japan 櫻井

「一つの町会でできることは限られている」「防災を日常に」をいつも念頭に置いた町会の取組みについて伺いました。商店会、防災団体、学童保育所、地域包括支援センター、企業の独身寮等と連携することで、一味違った楽しい防災イベントを企画し、ご近所同士のつながりが最大の防災とするまちづくりをお話いただきました。

③東京都生活協同組合連合会 栗田（本ワークショップワーキングメンバー）

宅配事業を活用した地域の見守り事業や防災ネットワークへの参画など、生協の平時からの取組みについてお話いただきました。加えて、生協の施設、組合員、トラック、拠点、仕組み等を災害時に活かすこと、平時からその視点を持って取り組んでいくことの課題感についても触れられました。

<コメンテーター> 東京都立大学 市古

事例発表を通して、平時の地域の取組みやネットワーク・集団とつながっていくことの重要性を改めて認識できたことについてコメントがありました。



①



③



②



コーディネーターの
ちよだボランティアセンター清水(左下)
と登壇者 3 名

メイン・プログラム（プレイヤー参加）

【ワークショップ】プログラム3：ワーク

◇事前課題

- 事前課題にて2種の動画の視聴を必須とすることで、参加者は発災3か月後に想定される被災地・被災者の状況、および、被災者支援プログラムに関して確認したうえで臨む場としました。
- 事前課題：動画「首都直下地震3か月後に想定される状況」
説明：ボランティア・市民活動センターたちかわ 小林
- 事前課題：動画「被災者支援プログラム」
説明：ピースポート災害支援センター 辛嶋

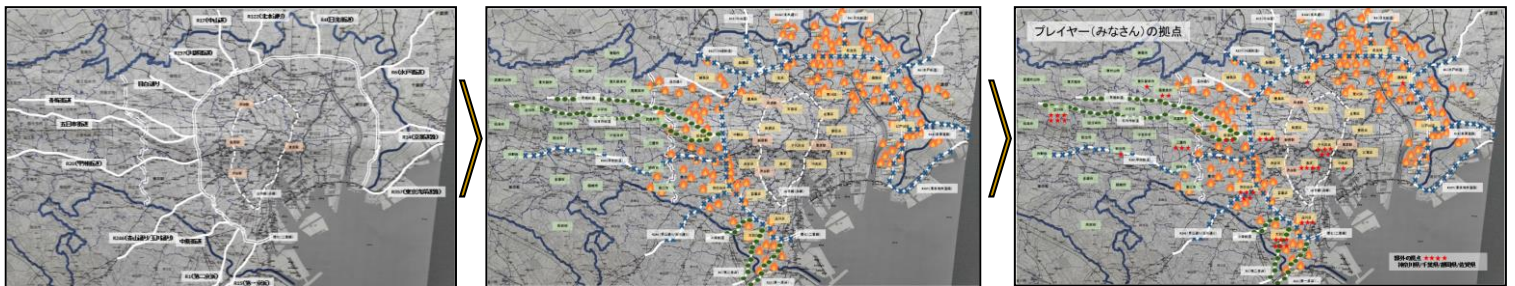
◇事前課題動画の振り返り・クイズの解説

- 当日、ワークの開始直前に、6問のクイズ解説を軸に事前課題動画の内容を振り返りました。
- 災害復興まちづくり支援機構 田村とADRA Japan 小出がキャッチボール形式で説明しました。

◇地図を使った都域の被害の確認

- 首都直下地震発災直後のおおよその被害想定について、広域（都域）の視点をもって、視覚的に理解することを促しました。また、団体間や他地域との間で被害想定を共有し、共通認識を持つことの重要性についても示しました。
- まずは内閣府の動画2種（「首都直下地震編 被害想定全体像」「被害の特徴解説」）を視聴しました。その後、都域の地図を用いて、交通規制、全壊・焼失の激しい地域を確認しました。さらに地図上に、参加者の活動拠点を印すことで、より現実的に、且つ都域にわたる広域で、被害想定を認識することを促しました。自団体の活動拠点の被害が大きい場合には被害が小さい地域の団体からの支援を、自地域の被害が小さい場合には被害が大きい地域へ支援を検討することも訴えました。

都域の地図を使用した「道路の状況」と「被害の様相」



◇ワーク

- 避難生活が中長期化している発災3か月後に「食事・炊き出し」「物資・情報を届ける」いずれかの支援プログラムを実施すると仮定しました。事前課題で状況設定を確認いただき、当日は連合東京 蒔田の進行による振り返り・補足の後、各団体のリソースを棚卸し他団体のグループメンバーとの協力・連携をワークショップ型で探りました。
- オンライン上で8グループに分かれ、模造紙に付箋を貼っていくようにオンラインツール（Jamボード）を使用し、選択した支援プログラムの実施について検討しました。
- 新型コロナウイルスのことは考慮せずに進め、ただし感染症対策下では団体間連携がより身近な地域で求められることを伝えました。



Jamボードを使用して『物資・情報を届ける』プログラムに取り組むルーム2の様子

- 各団体・個人の特性や資源を活かして、平時の活動の延長線上でできることの意見交換が行われました。例えば、「食事・炊き出し」プログラムでは、アレルギー表示の必要性が挙がり、そのためには当事者やその家族、支援団体とのつながりを発災前から持つ必要があると意見が言及されました。また、「物資・情報をとどける」プログラムでは、SNS等による情報拡散や迅速性に触れられる一方、そこにアクセスできない方々に向けた方法も持ち合わせる必要があるとの意見が交わされました。いずれも、地域に根差した視点、被災者に近い視点ならではの意見がみられました。

振返り・閉会

●3名のコメントーターより、プログラムへのコメントをいただきました。

<コメントーター>

東北大学災害研究所 マリ・エリザベスさん

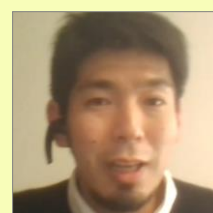
平時の取組みが災害時に役立つことは国際的な共通点であること、多様な支援の情報を共有することが大切であること、災害時にはどのようなニーズが発生し、その差が起り得るか考えておくべきであることが示されました。その上で、「災害ケースマネジメント」と「ミューチュアルエイド」の二つのキーワードが提示されると共に、普段からの連携が災害時の助け合いの強さに大きく関わることを改めて訴えかけられました。

※ミューチュアルエイド……相互扶助。助け合い。



京都経済短期大学 菅野拓さん

東日本大震災では被災者支援を主な目的にしていない団体が支援の多くを担ったこと、多くの被災者が支援の枠組みから漏れてしまったこと、行政と民間団体が持つ情報はそれぞれ特徴があり、支援においてはどちらも重要で活用すべきものであることの話がありました。これらを踏まえ、いつもともしもをつなぐ「フェーズフリー」(平時の仕組みを災害時にいかに柔軟に転用するか、普段の活動にいかに災害時のメニューを組み込むか、逆に災害時に向けた取り組みをいかに平時の取組みに活用するか)という考え方、そして、団体同士が顔を合わせて構築する信頼関係の重要性について述べられました。



浄土宗福島教区青年会浜通り組 浜〇(はままる)カフェ 馬目一浩さん

東日本大震災および令和元年台風第19号での経験をもとに、支援は多様でありそれぞれが尊重されるべきであること、そして、どんなことでも支援につながる・つなげられる可能性があることから、平時から積極的に様々な人とつながりを持つことの大切さが伝えられました。また、発災3か月後であれば地域住民がマンパワーになり得るため、地域住民を積極的に支援に関われるよう促すことの重要性について指摘がありました。



●閉会挨拶

シャンティ国際ボランティア会 山本英里さん



メイン・プログラム (見学参加)

意見交換・情報交換

◇プレイヤー参加プログラムのワークショップについて

●初めて完全オンラインでの実施であることから、見学参加者によるワークショップの視察は実施せず、真如苑 SeRV 河野よりプレイヤーが実施する「プログラム3：ワーク」のねらいや内容を伝えました。ワークの結果は、2月24日開催するスピノフ・プログラムにてお伝えする案内をしました。

◇意見交換・情報交換

●AAR Japan 生田目の進行のもと、【パネルディスカッション】プログラム2も踏まえた意見交換・情報交換、質疑、感想の共有の場を持ちました。ダイナックス都市環境研究所 津賀より、地域住民との接点は住民側も求めていること、今日の気づきを持ち帰って職場の同僚等まずは身近な人に話していただきたいこと等を伝えました。

スピノフ・プログラム

※手話通訳者を派遣依頼し、オンライン画面上に常時表示して開催しました

メイン・プログラム ワークショップの解説・振り返り

- メイン・プログラムで実施したワークショップのねらいや内容に関する解説、得られた成果などについて、プログラム3：ワーク担当のピースポート災害支援センター 辛嶋と、進行のダイナックス都市環境研究所 津賀の会話形式で進めました。
- 被災者一人ひとりの困りごとに、様々な団体が情報共有しながら支援することの重要性を伝えました。また、災害時の対応は日常の連携や地域作りの延長線上にあり、広域・大規模の被害に対し平時から取り組むことの必要性についても伝えました。



話題提供

- 配慮が必要な方への災害時の支援に関する話題提供をしました。平時から多様な方々と共に防災・減災の取組みを進めていくヒントを得る場として、障害のある方々、外国人の方々と共に活動している2団体よりお話をいただきました。

<登壇者>

話題提供① 自立生活センター STEP えどがわ 今村登さん

障害当事者団体。江戸川みんなの防災プロジェクト (EMINBO) の一員として、「みんなが助かる みんなで助ける」をコンセプトにした活動の枠組みや取組みについて情報提供いただきました。EMINBO が区民主体の多様なメンバーで構成されていること、そして、福祉関係者、障害当事者、地域防災関係者、子育て関係者など区内の多様な団体と共に勉強会や交流事業を実施していることをお話いただきました。



話題提供② KUNIBO 山崎由紀子さん

防災をツールに多文化共生を考える活動について情報提供いただきました。外国人住民と地域住民の接点を生み出す取組み（防災訓練への参加や自主防災会を講師とした勉強会の開催等）、多文化共生社会における社会教育に防災活動を位置づけた取組み（家具転倒防止器具の付け方実践、段ボールトイレづくり等）についてお話いただきました。



意見交換・情報交換

- 地域に根差した活動を拓げていくという観点から、活動地域が近い参加者同士を同じグループに構成し、話題提供への感想や今後取り組みたいことなどの意見交換・情報交換の場を持ちました。

◇他の団体との連携をすすめる上での課題

- ・認知症関係の活動をしているが、ご家族が「認知症のことを近所に知られたくない」という傾向が強く、普段からつながりを作ることが難しい。
- ・地縁団体に加入している/いない住民では、お互いに壁があるように思える。
- ・市民参加のリーダーが必要。特に、若い世代との交流を進めていくことが課題。

◇今回の連携ワークショップに参加した成果

- ・普段からつながっていることが大事。今までやってきたことの意義も再確認できた。
- ・地域の方が多く参加されていて普段は見えない動きがわかった。地元の方とつながることも大事だと感じた。
- ・頭でっかちの防災・災害対応になってしまっていないか？と自問自答した。気づきを社内でも広めていきたい。

◇今後への決意

- ・「地域の中の防災・減災以外の活動をしている団体との連携を、具体的なプログラムと一緒に実施することで進めていく」ことを実践していきたい。障がい者団体との協働プログラムを社協と一緒に考えていきたい。
- ・区域を超えて、いろんな団体とのつながりを作っていきたい。飛び込んでいくことが大事だと思った。

参加者の声

メイン・プログラム

●プレイヤー参加者

- ・とてもよい講義とワークショップでした。自分で何ができるのか？という問いかけと、周りの人との連携を深めていく、というこれからの課題がはっきりとしました。
- ・それぞれの団体の強みを互いに理解し、連携していくことが大切だとワークショップで改めて知りました。同じ地域（区など）でグループを組んで、定期的にこうしたグループトークをするだけで、災害時の対応がまったく変わってくると思いました。
- ・様々な団体、様々な人が参加されていたのですが、リモートだと伝わりにくいですね。つながりが持てたと実感できる何かがあるといいですね。

●見学参加者

- ・平時から団体ごとにつながりを持てるところもあれば、どういった団体があるのか分からないところもあるため、平時からどういった団体がどういった分野で活動しているか分かるリストを作成し、緊急時、分野ごとに情報共有できる仕組みがあると良いと感じました。
- ・私の自治会では高齢化により「自主防災隊」は解散してしまい、今後は子ども防災のことも含めて考えていこうと思います。生協の組織や事業について伺い、配送が安否確認になっているとは思っていませんでした。介護中の家族の支えにもなると思います。

スピノフ・プログラム

- ・様々なひとが暮らす地域で、多様なニーズに対応するためには、多様な団体とつながることが大切。自分自身や自団体の力には限りがありますが、つながり合うことで、大きな力になると感じました。
- ・自分たちの地域だけでなく、他の自治体との連携も大切だと思いました。まずは隣接しているところと何か考えていければと思いました。
- ・日頃からご近所付き合い、地域活動に参加して、有事の際に地域力を発揮することの大切さ。
- ・対面実施では可能な名刺交換や連絡先交換がやりにくかったのがちょっと残念な点でした。

◆企画・運営 ワーキング・グループ ※ワーキングメンバーは以下の通り

ピースボート災害支援センター（辛嶋友香里）／シャンティ国際ボランティア会（渡邊珠人）／AAR Japan[難民を助ける会]（生田目充、櫻井佑樹）／東京災害ボランティアネットワーク（福田信章）／東京都生活協同組合連合会（栗田克紀）／ちよだボランティアセンター（清水昌代）／ボランティア・市民活動センターたちかわ（小林伸匡）／連合東京（真島明美、蒔田純司）／東京都立大学（市古太郎）／ADRA Japan（小出一博）／災害復興まちづくり支援機構（田村裕美）／真如苑 SeRV（河野吉紀）
〈サポーター〉ダイナックス都市環境研究所（津賀高幸）／減災と男女共同参画研修推進センター（浅野幸子）

主催：東京都災害ボランティアセンターアクションプラン推進会議

【問合せ】東京都災害ボランティアセンター アクションプラン推進会議（事務局：東京ボランティア・市民活動センター）
電話 03-3235-1171 E-mail saigai@tvac.or.jp

※本プログラムは、東京都共同募金会の助成金、連合東京の支援金等により実施しました。